



talk! talk! talk! 俳優・吉田友一さん



俳優 吉田友一さん

ドラマ「特捜戦隊デカレンジャー」の出演がきっかけでブレイクし、多数のドラマや舞台、映画での活躍が目覚ましい若手俳優・吉田友一さん。中性的な雰囲気でありながらも、学生時代は野球一筋というギャップが魅力的な吉田さんは、撮影を楽しむだけでなく、暗室作業やカメラ販売の経験を持つ。彼の明朗活発な人柄も垣間見える写真への熱いトークをお楽しみください！

プロフィール

よしだ・ともかず 1982年新潟県生まれ、埼玉県育ち。スカウトをきっかけに芸能界入り。2003年にドラマ「ライオン先生」で俳優デビュー。翌年、ドラマ「特捜戦隊デカレンジャー」の始良鉄幹（アイラ テツカン）/ デカブレイク役で人気を集める。端正な顔立ちと抜群のスタイルで、その後も映画「Life」や舞台「bambinoバンビーノ」など多数の作品に出演。2008年は舞台「となりの守護神」で主演後、映画「ぼくらの方程式」やTVドラマ「Room Of King」等に出演。

Beginning 出会い

思い出を残したい その思いがきっかけ

写真を撮り始めたのはいつ頃からですか？

高校生の頃です。思い出を残したいと思ったんです。プリクラもよりも、もっとちゃんとした形で“今”を残せたらと思ってレンズ付きフィルムを買いました。当時、野球一色の生活だった僕の初めての被写体は、もちろん野球部仲間。だから写真は坊主頭だらけでした！女子高校生が記念写真を撮るようなノリで、バシャバシャ撮っていて、みんなからは嫌がられたのを憶えていますね（笑）。

青春の思い出を切りとったのですね。吉田さんが坊主で野球少年だったとは、今の外見からすると意外です。

父が男らしいタイプで「男の長髪は断じて許さん！」という厳しい人だったので、僕は0歳から18歳までずっと丸坊主だったんですよ。そんな父が、僕が写真を撮り始めたらコンパクトカメラを貸してくれて、それからより写真に興味を持つようになりました。大学に入って、サーフィンやスキーをするサークルに所属したんですが、写真部にも入りまして、さらに中古カメラ屋でアルバイトも始めたんです。

それだけ写真に夢中になっていたのですね。

はい。それに半年間、週に1回の写真の学校にも通いました。学校では講義と実技があって、被写界深度や露出のことなど技術的な面でかなり勉強できましたね。

とても積極的に写真を撮学んでいらしゃったのですね！カメラを売るという経験はいかがでしたか？

カメラに関しての知識はあまりなかったので、先輩に聞きながら製品の特徴を憶えて、お客さまに説明していました。「お客様が欲しいなら僕も買いたくなっちゃうな〜」なんて愛嬌を出しつつ（笑）。現像作業も担当していて、機械焼きでしたが色調整は僕がやっていました。お客様のプリントのご要望に応えながらも、僕なりにいいと思う色合いを提案することもありました。「こういった色の出方もありますよ」とお見せして、僕が調整した方を「いいね」と言われたときはすごく嬉しかったですね。仕事をしながらプリントのセンスを会得できたと思います。そのお店で働いているときにNikonのEMを買って一眼レフカメラデビューをしました。今は複数機持っています。

Nikon EMを選んだ理由を教えてくださいませんか？

僕はずっとNikon EMを自分の生まれ年と同じ1983年製だと思っていました。それでずっと気になっていて、シャッター音もいいですし、感覚的に気に入ったんです。本当は1980年製だったんですけどね（笑）。今も一番愛用しているカメラです。

ありがとうございます。大学の写真部ではこういった活動をされていたのですか？

撮影して暗室作業、撮影して暗室作業の繰り返しです。とにかくプリントすることに没頭して、暗室に朝の9時に入って、気がついたら夜の9時なんてときもありましたね。とにかく楽しかったです。暗い暗室の中でロニー・ロリンズやキース・ジャレットなどのジャズをかけながらプリントするのが好きでした。たまたま渡辺美里さんの「My Revolution」をかけて、「変わらなげや！自己革命起こさなげや！」とハイテンションになったりもしていましたよ（笑）。

（笑）。楽しそうですね！部員の方たちとは写真論を熱く語り合ったりも？

部員は30〜40人程度でしたが、真剣に写真と向き合っていたのは少数だったんです。でも写真部の副部長が文学部の人で「俺は中原中也を研究しているから、中也の詩の世界観を写真で表現する！」と言っていたんです。僕は「こいつカッコいい！」と思って、影響を受けました。その写真は僕がモデルになったんですけどね。

どんな感じの写真になったのですか？

地下駐車場で上半身裸になって、かなりのローアングルから僕を撮っていました。今考えると男ふたりで結構怪しい状態ですよ（笑）。写真部内では僕自身が被写体になることも多くて、それも写真の勉強の一環だと思ってやっていました。

Pleasure 楽しみ

旅と写真の密接な関係

普段はどういったものを撮ることが多いのですか？

学生の頃から旅が好きで、旅先で風景を撮ることが多いですね。構図にこだわって撮っています。日本は44都道府県、海外はオーストラリア、ニュージーランド、タイ、ブーケット、アメリカなどいろいろな土地に行って写真を撮りました。地方の温泉街で一ヶ月の住み込みのアルバイトをして、仕事の合間に撮影したり。その温泉宿に泊まりに来ていたオーストラリア人と仲良くなって、オーストラリアまで訪ねて行き、一緒に彼の大学に通って講義を受けたりしていました（笑）。

とてもアクティブなんですね。

そうですね。ただ向こう見ずでもあるので、長所であり短所というか。18歳まで野球しかしていなかったんで、大学に入っていることができるようになり、世界が広がるのが楽しかったんです。僕はどちらかというと群れて遊ぶより、ひとりで未知を探求することが面白くて、それでよく旅に出かけてました。友だちとの飲み会やコンパももちろん楽しかったんですが、アルバイトをして自分で学費を出していたということもあり、そういった遊びに1から10までつき合っははられませんでした。それにもっと違う楽しさを得たかったんです。だから旅が好きで、写真と旅は僕の中で密接な関係なんです。

複数カメラをお持ちだとうかがいましたが、旅にカメラは何台持っていかれるのですか？

そのときどきによりますが、一昨年N.Y.に行ったときはNikon EMと二眼レフカメラを持って行きました。N.Y.は二眼レフカメラだ！と直感で思って、二眼レフカメラをメインカメラにしていたんですが、使い慣れていなかったため操作に手間どってしまったんです。街のスピード感は撮りきれないし、現像した写真を見たらがっかりの結果だったんですよ（笑）。Nikon EMでも撮っていたので、まだよかったです。



それはリベンジしたいですね。最近は学生時代と違って、お忙しいと思いますがやはり写真は旅先が多いのですか？

さすがに頻繁に遠出ができなくなったので、最近の撮影のテーマは故郷になりつつあります。僕は生まれが新潟の長岡で、育ちが埼玉の浦和なんですが、芝居で行き詰まったり不安だったりすると、原点回帰というか、生まれた街、育った街に帰って撮影をするんです。新潟は、穏やかで和める景色に単純にすごく惹かれます。浦和は都会でもなく田舎でもないんで、風景的には中途半端だと思っていたんですが、最近は見え方が変わってきました。今東京に住んでいるからか、浦和のいい風景に気づけるようになったんです。普段コンクリートジャングルにおかされているからでしょうか（笑）。まあ、そこで今頑張っているんですけどね！

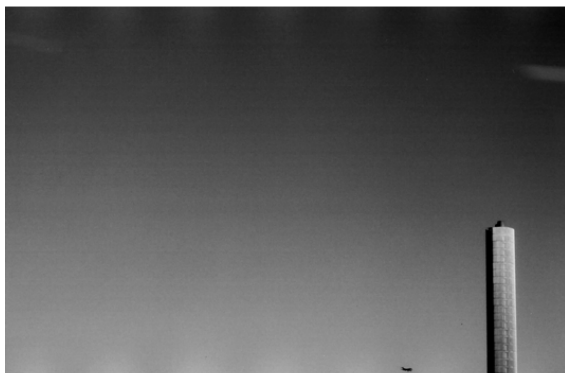
故郷の良さは、一度離れてわかることかもしれませんね。

そうですね。外から故郷に帰ってきた時、見え方が変わりましたね。やはり自分を育ててくれた風景なので、心に引っかかる景色がたくさんあるんです。もっと自分の故郷を尊重した写真が撮れたらいいなと思っています。お正月に実家に帰れるかはわからないんですが、もし帰れたら子供の頃に犬の散歩で通った道や畑を撮ってみようと思っているんですよ。

Photo's 作品紹介

旅した海外から生まれた街まで 吉田さんの心に触れた風景







Future これから

写真でも何でもやりたいことがいっぱい！



考えています。

確かに文章も個性的ですよ。

文章を書くのも結構好きなんです。「Yahoo! JAPAN文学賞」というコンクールがあるんですが、毎年応募しています。一回も選ばれていないですけど（笑）。

では、写真に関してこれから挑戦したいことはありますか？

16歳から写真を撮り始めて10年間やってきたんですが、最近は撮った写真を動かしてみたいという気持ちが出てきています。動画というか、写真をつなげて風景を動かしてみたいです。あとは、女性のヌードを撮影してみたいんです。というのも、多くの写真家がどうして裸の女性を被写体にしたのか、ずっとさっぱりわからなかったんです。でも、撮ることで理解できることもあるだろうと思い、挑戦したいと思っています。

最後に吉田さんにとって写真とはどういった存在ですか？

むずかしいですね……。自分の内面を表現できるもの、ですね。そういった意味では芝居も同じで、僕は芝居を始める前は、面白いことを思いついても口にするのができなかったんです。でも芝居をして自分を解放することができた。写真に関しても、撮影をすることで今の自分の気持ちを表現できる、自分の気持ちに沿ったものを形にできるという気がしています。それに、ただ気持ちを解放できるということだけじゃなくて、自分の気持ちと向き合うこともできるんです。写真は恋人というよりは、兄弟という感じですね。いろいろな気持ちを話せて、なおかつ、一緒に旅に行ける、冒険できる相手というか。海や山へ行くとときなんかは、地図と果物、あとは助手席にカメラとフィルムを乗せればOK。僕がいろいろな体験をするときにいつも側にいて、より楽しくさせてくれる、そんな存在ですね。

学生時代から写真を撮り始めて、今も撮られているわけですが、写真に対する接し方に变化などはありますか？

昔は毎日、毎日シャッターチャンスを逃すまい、逃すまいと思って、頑張って被写体を見つけようと探しまわっていました。でも今はもっと楽な感覚で、日常の中で自分が気になったものを切り取るというスタイルになりました。むやみやたらにシャッターを押すのではなく、ちゃんと1枚1枚を作品として写真におさめようという太い気持ちが芽生えてきたんです。

ブログにも写真を掲載されていますが、ブログは吉田さんの作品を発表する場として機能しているのですか？

そうですね。ブログが今一番僕の作品を見てもらえる場所かも知れません。見ている人の第六感を刺激できるようなものを載せたいと思って、写真も文章も

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.